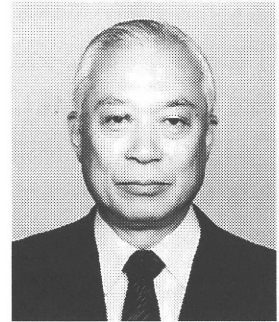


## OPINION

### 二十世紀の予言から二十一世紀へ

杏林大学名誉教授 鍋谷欣市



過日、一友人から古い新聞のコピーが送られてきた。ちょうどいまから95年前、1901年（明治34年）1月2～3日の報知新聞であった。報知新聞は現在の読売新聞であるという。時代の背景という点では、先の昭和天皇がこの年の4月29日に誕生あそばされている。タイトルが“二十世紀の予言”というもので、23項目について100年後の世界をずばりと予測したものであるが、その内容と今日の社会生活を対比してみると、実にすばらしい先見の明があつて適中している項目が多いことに感嘆せざるをえない。

一方、1945年、第二次世界大戦終結のときより数えると今年は51年目に当たり、1世紀の過半を経過したことになる。私自身が医科大学に入学したのが1948年であるから、以来すでに半世紀の歳月を経たことになる。医学における進歩の目覚ましきは、あの当時に比し信じられないものがある。ここにその変動、変様を考察してみたい。

#### 明治時代にみる二十世紀の予言

件の新聞の原文は文語体、旧仮名づかいであるが、おもな文章は原文のままとする。

「十九世紀は既に去り、人も世も二十世紀の新舞台に現はるゝこととなりぬ。十九世紀に於ける世界の進歩は頗る驚くべきものあり、形而下に於ては、“蒸気力時代”“電気力時代”の様あり、また形而上に於ては“人道時代”“婦人時代”の名あることなるが、更に歩を進めて二十世紀の社会は如何なる現象をか呈出すべき。（中略）今や其大時期の冒頭に立ちて遙かに未来を予想するも亦た快ならずとせず。世界列強形勢の変動は先づさし措きて、暫く物質上の進歩につき想像するに…」

以上は冒頭の辞であるが、十九世紀は“蒸気力時代”“電気力時代”であったが、二十世紀は果たして何の時代と呼ぶべきであろうか。また、その予言を世界列強形勢の変動は先づさし措きてと逃げるなど、その困難性を知つてのことか、世界列強への配慮に

よるものかは別として、賢明といわざるをえない。なぜなら、この世紀にロシア帝国の形態が大きく変動することなど予測しえなかったであろうと思われるからである。

物質上の進歩の予定項目を追ってみよう。

- ① 無線電信および電話——マルコニー氏発明の電信電話は一層進歩し、東京からロンドン、ニューヨークの友人と自由に対話できる。
- ② 遠距離の写真——数十年後、東京の新聞記者は編集局にしながら、天然色の早取り写真を入手できる。以上は完全な適中である。
- ③ 野獣の滅亡——アフリカの原野で獅子、虎などを見ること能わず、大都会の博物館で余命を継ぐべし。これも然りである。
- ④ サハラ砂漠——沃野化するは、適中しない一つである。
- ⑤ 7日間世界一周——もっと速く一周できよう。
- ⑥ 空中軍艦・空中砲台——チェッペリン式の空中船が大いに発達し、空中に軍艦が漂う修羅場の出現を予言している。実は、この直後1903年にライト兄弟が動力飛行に成功し、1945年には原爆が投下されたのである。人工衛星、月着陸までは予測していないようだが、適中といえよう。
- ⑦ 蚊および蚤の滅亡——衛生事業の進歩。
- ⑧ 暑寒知らず——空調の発明。
- ⑨ 植物と電気——電気力による野菜の成長など、今日の温室栽培を予測している。
- ⑩ 人声十里——伝声器は10里どころではなくなっている。
- ⑪ 写真電話——テレビ電話である。
- ⑫ 買物便法——テレビショッピングなど、あまりに適中している。
- ⑬ 電気の世界——薪炭、石炭に代わる。
- ⑭ 鉄道の速力——東京・神戸間は2時間半を要するの予測は、あまりの適中に驚かざるをえない。
- ⑮ 市街鉄道——街路上を去って空中、地中を走る。然り。
- ⑯ 鉄道の連絡——五大州を結ぶ。
- ⑰ 暴風を防ぐ——気象観測が進歩し、天災を1カ月前に予測し、地震はあっても家屋・道路の建築はその害を免がれるであろうは、いまだしてである。
- ⑱ 人の身幹——6尺（180cm）に達すは然りである。
- ⑲ 医術の進歩——“（原文）薬剤の飲用は止め、電気針を以て苦痛なく局部に薬液を注射し、また顕微鏡とエックス光線の発達によりて病源を摘発して之に応急の治療を施すこと自由なるべし。また内科術の領分は十中八九まで外科術に移りて後には肺結核

の如きも肺臓を摘出して腐敗を防ぎ、バチルスを殺すことを得べし。而して切開術は電気によるを以て最も苦痛を与ふること無し。”

Torek が胸部食道癌の手術に成功したのが1913年、あらゆる分野においてその進歩は、明治の予測を遙かに凌ぐものと思われる。臓器移植は考えなかったようである。

⑳ 自動車の世——まさに然りである。

㉑ 人と獣との会話自在——獣語の研究進歩して小学校に獣語科あり、下女下男の地位は犬によって占められ、犬が人の使いに歩くは、いまだ否といえよう。

㉒ 幼稚園の廃止——家庭に無教育の人無きをもって幼稚園の必要がなく、大学を卒業しなければ男女とも一人前ではない。後半は然りであるが、前半は当たっていない。

㉓ 電気の輸送——琵琶湖の水で水力電気を起こし輸送。

とにかく、二十世紀は奇異の時代なるべしと予言しているが、いまやわれわれはその奇異の時代より、つぎの二十一世紀というさらに奇異の時代に移らんとしている。

### 二十一世紀の医学への予言を望む

動物は天候、気候の変化を予知して対応する能力があるといわれる。カマキリは雪の多い年を予知して高い枝に巣を作るという。やがて来るであろう事象、時代を予測することはけっして容易なことではないが、明治の人の予言は、その適中率の高さに驚くばかりである。

二十世紀後半の医学の進歩を顧みると、まずエレクトロニクスの医学応用が挙げられよう。かつて1960年ころまでは、腹部X線検査は暗室で、医師が直接腹部を圧迫しながら透視診断したものである。眼を慣らすために黒い眼鏡をかけ、いったん暗室に入ると出ないように心がけた。透視のために放射線障害で手指のみならず一命を失った医師もあったのである。CT、MRI、USといまや画像診断は目覚ましい進歩を遂げつつある。

内視鏡も1960年ころまでは硬性鏡の時代であった。いかに患者の苦痛が少なく内視鏡を挿入するか、また損傷を少なくするかということが重要な課題でもあった。今日のファイバースコープの多くの機能から、内視鏡手術への発展は、期待してはいたものの加速度が大きい。

第二次世界大戦直後の日本は、物資欠乏の時代であったが、特に抗生物質の入手が困難であった。感染症に対するペニシリンの威力はすばらしく、そのために無菌対策がおろそかになるのではないかとさえ危惧された。それが、今日ではMRSAの出現である。細菌と薬剤の戦いは永久に終わることはないであろう。したがって、その対策は、すべてにわたって共存協定になるのではないかと考えられる。絶滅ではなく弱体化、休止化

という考えである。

学生時代の重要な試験内容であった寄生虫卵の判定も、今日では不要の項目であるらしい。法定伝染病も、予防接種なども変わってしまった。高齢化社会を迎えて、死因も癌が第一位を占めている。科学技術庁では疾病の予測を定期的に行っているようであるが、つぎの二十一世紀において重要視されるのは、精神病といわれている。物質文明の究極においては、皮肉にも目に見えない気の病いが対象となりそうである。画像診断をはじめとして、形あるもの、数値として捉えられるもの以外の疾病に対しては、いかなる対応が必要であろうか。遺伝子医学の発展は大いに期待される分野であり、ロボット医学も極限まで進歩するかもしれないが、二十一世紀の医学の予言を具体的に立てることが望まれる。

(杏林大学名誉教授、昌平クリニック院長、  
赤坂病院顧問、日米医学医療交流財団理事長など)